第23回日本統合医療学会　プログラム・抄録集の一部に記載の誤りがありましたので、訂正し、お詫び申し上げます。

正誤箇所：　プログラム・抄録集214ページ

（１）役員一覧　組織委員会　委員10名のうち、浅川　明弘委員について肩書の訂正

「誤」　IMJ鹿児島県支部副支部長

「正」　（一社）日本統合医療学会理事　第23回日本統合医療学会副大会長

（２）プログラム委員会　委員名簿の記載漏れ

「誤」委員10名

赤木　純児（一社）日本統合医療学会理事
板村　論子（一社）日本統合医療学会業務執行理事
猪股　千代子（一社）日本統合医療学会理事
小野　直哉（一社）日本統合医療学会業務執行理事
蒲原　聖可（一社）日本統合医療学会理事
鈴木　清志（一社）日本統合医療学会理事
福岡　博史（一社）日本統合医療学会理事
山口孝二郎（一社）日本統合医療学会100人委員会、IMJ鹿児島県支部理事
黒木　靖子IMJ鹿児島県支部理事
中野　明子IMJ鹿児島県支部理事

「正」委員11名

赤木　純児（一社）日本統合医療学会理事
板村　論子（一社）日本統合医療学会業務執行理事
猪股　千代子（一社）日本統合医療学会理事
小野　直哉（一社）日本統合医療学会業務執行理事
蒲原　聖可（一社）日本統合医療学会理事
小池　弘人（一社）日本統合医療学会理事　　（追加）
鈴木　清志（一社）日本統合医療学会理事
福岡　博史（一社）日本統合医療学会理事
山口孝二郎（一社）日本統合医療学会100人委員会、IMJ鹿児島県支部理事
黒木　靖子IMJ鹿児島県支部理事
中野　明子IMJ鹿児島県支部理事

第23回日本統合医療学会学術大会組織委員会

差し換えのお願い

このたび運営事務局の手違いにより、演題締切が過ぎた時点で、修正システムの停止をしなかったため、印刷に入ってしまい、修正が間に合いませんでした。申し訳ございませんでした。修正抄録は以下の通りです。差し換え頂きますようお願い申し上げます。修正部分は赤文字でアンダーラインの部分です。

0ー1

経穴への圧刺激を組み込んだフェイシャルケアによる心身への効果

高瀬 麻衣 1)、高取 孝光 1)、田村 かすみ 1)、前橋 万里子 1)、山崎 翼 2)、安野 富美子 3)、矢野 忠 2)

1)株式会社シーボン 研究開発部

2)明治国際医療大学

3)東京有明医療大学

【目的】

フェイシャルケアは一般的に、美容目的として魅力の向上や心のリラクゼーションの効果を実現できる手技であると認識されている。その中でも、顔面部経穴への圧刺激を用いたフェイシャルケア（以下、フェイシャルケアとする）の施行は、東洋医学的観点から身体への効果が期待できる。反面、学術的な検証事例の報告は少ない。今回フェイシャルケアを実験的に検証することで、その心身への影響について新たに知見を得たので報告する。

【方法】

健康な女性 10人に対して 20 分間のフェイシャルケアまたは仰臥位閉眼安静（コントロール）の施行を、1 週間以上の間隔を空けて行い、各介入順序はカウンターバランスを取った。主観的評価として、気分状態を POMS2®日本語版、身体及び精神症状を視覚的アナログ尺度（VAS）にて測定し、生化学的評価としてストレス反応に関連する唾液中因子を、認知科学的評価として近赤外分光法（NIRS）にて①頬を触る（肌触り）②創造性テスト（AUT）遂行時の前頭前野血流動態を測定した。なお、本研究は明治国際医療大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

フェイシャルケアによって、身体的疲労・精神的疲労・肩こり、さらに腹部不快感に対する改善傾向（VAS）、及び混乱・疲労・活気・総合的気分スコアに対する改善傾向（POMS2）、唾液中のオキシトシン濃度の増加傾向が観察された。また、前頭前野の脳血流動態は、肌触り課題時では左側で増加傾向が、AUT 課題時では左側優位に変化する傾向を示し、課題成績の向上も観察された。

【考察】

顔面部経穴への圧刺激を用いたフェイシャルケアは、リラックス効果と共に、心身の不快感低

減やポジティブな感情励起、創造性の向上をもたらすことが示唆された。つまりフェイシャルケアは美容効果だけでなく、心理的そして身体的な健康増進によって QOL 向上に貢献することができると期待される。

O－2
自覚的な消化器系愁訴と膝の痛みの関係について

篠原　昭二 1)、森川　直輝 1)、内田　匠治 1)、髙橋信　博 2)、三谷　直也 3)
1)九州看護福祉大学大学院健康支援科学専攻
2)玉名地域保健医療センター
3)熊本赤十字病院

【目的】
変形性膝関節症（PF 関節）は、精神的ストレスで肝胃不和を来した場合や飲食の不摂生等で胃の腑の異常をきたした後で発症することが多く経験される。しかし、消化器系愁訴と胃経上に出現する膝関節の症状が関連するとした研究報告はみられない。そこで、消化器系の自覚的な愁訴と膝の痛みとの間に関連があるのかどうか検討した。

【方法】
研究対象は研究の趣旨に対して同意を示した本学の学生 40 名(平均年齢 20.9 歳、男女比 5：3)で、消化器症状（お腹の調子）の評価法として Functional Dyspepsia のスクリーニングテストである出雲スケールを採用した。また、膝の痛みについては、**全日本鍼灸学会膝痛班作成(1991 年)による「膝の痛み調査票」を用いて自覚的な膝痛の程度について調査し、**スピアマンの順位相関を求めて検討した。

【結果】
①出雲スケールを用いてお腹の調子について調査した結果と、**膝の痛み評価**を対比して両者の相関関係について調査した。その結果、出雲スコアが低い人は**膝痛のスコアが低く**、出雲スケールが高い人は**膝痛のスコアも高くなるという、有意な正の相関を示した。**

【考察】
お腹の調子が悪くなると膝の痛みが強くなる結果を示したことから、両者の間に関連があることが明らかとなった。このことはお腹の調子が悪くなると胃の腑の異常から足陽明経脈・経筋の異常を引き起こして**膝の痛み**が強くなるという臨床知と一致するものであり、飲食の不摂生やストレスによる**肝胃不和等**の予防の必要性を示唆する所見と言える。

【結論】
出雲スケールを用いて消化器系愁訴について調査した結果と**膝の痛み**を対比して両者の相関関係について調査した結果、消化器系愁訴と膝の痛みとの間に相関が見られることがわかった。

O－8

Scalar-Plasma-Crystalline Sound Harmoniser による臨床効果の検討

福田　克彦
統合医療センター福田内科クリニック

【背景】

疾患(DIS-EASA)とは意識／エネルギーの振動的不調和の結果であり、それらは形態形成場の集団的不一致(マヤズム)による非コード遺伝子のエピジェネティックな電磁気的障害(スカラー波の歪み)によって引き起こされることが報告されている。

統合的なエネルギー医学である The Rasha® Scalar-Plasma-Crystalline Sound Harmoniser 技術は、プラズマによって発生した位相共役(時間反転)波含むスカラーEM 波／信号よって、罹患細胞の時間反転、形態形成場であるスカラー場の再パターン化によって、正常な細胞再生システムを構築できると考えられている。

【目的】

様々な難治性疾患において、The Rasha® Scalar-Plasma-Crystalline Sound Harmoniser による体系的な再調整効果を検証した。

【方法】

アルツハイマー型認知症を疑う軽度認知症(MCI)、リウマチ性間質性肺炎、脳性麻痺、過敏性腸症候群・膵臓癌(StageIV)患者などにおいて、Quinton isotonic 又は Quinton hypertonic 10ml/A p.o 又は i.v.後、The Rasha® Scalar-Plasma-Crystalline Sound Harmoniser によるセッション(1回 90 分程度/1～2 週間)を数ヶ月間施行した。

【結果】

軽度認知症(MCI)患者において、近時記憶の改善とはからめ®による嗅覚テストの改善が見られた。リウマチ性間質性肺炎の患者では、関節症状・呼吸困難感の軽減、KL-6 SP-D の低下と肺陰影の縮小を認めた。過敏性腸症候群を伴う膵臓癌患者においては腹痛・下痢の改善と多発性転移巣の縮小を認めた。脳性小児麻痺患者はストレスや疲労感・下腹部痛が軽減し、下肢装具離脱下での歩行機能が改善した。

【考察】

The Rasha® Scalar-Plasma-Crystalline Sound Harmoniser は、人体の自然な癒しのメカニズムを加速・強化し細胞再生システムを活性化することで、疾病の予防や改善の可能性が示唆された。

The Rasha® に関するご質問は以下の学会まで
QSS JAPAN TEAM 事務局　info@qssjapan.com

0－13

認知症治療施設入居者の睡眠及び日常生活動作能力、周辺症状に及ぼすアロマテラピーの効果の検証―唾液中α-アミラーゼの測定―

宮森　孝子

マリアズリリーアロマテラピースクール

【背景】

先行研究において認知症の周辺症状がストレス時に増悪することが報告されている。ストレス状況下で生体が反応する機序と嗅覚の機序がほぼ同じことから、アロマテラピーの効果の検証を試みた。

【目的】

認知症高齢者の睡眠状況、認知症に伴う周辺症状に及ぼす精油の効果についての検証を目的とした。

【方法】

主治医や本人及び家族の了承を得られた認知症高齢者を、精油のブレンドオイル塗布による介入群と対照群に無作為に割り付け、介入前後で比較検討した。介入に際しては倫理的配慮として対象者その家族に十分説明し同意を得た。また病棟医や看護師対象に説明会を実施し介入を行った。

使用精油としてプチグレン（アントラニル酸ジメチルの抗不安作用や鎮静作用を期待）マンダリン（上記に同じ）ティートゥリー（テルピネン－４－オールの副交感神経強壮作用を期待）のケモタイプ精油を植物油に１％濃度で希釈し、**１日１回就寝前に８日間後頚部から鎖骨に向け塗布**した。介入前にパッチテストを行い、判定は国際接触皮膚研究斑の基準に従った。評価は、唾液中ストレス関連指標α‐アミラーゼの測定、N-ADL、CDR、DBD を使用し、睡眠時間および夜間覚醒回数は看護師による観察を行った。介入前後の比較は Wilcoxon の符号付順位和検定を用いた。

【結果】

対照群では日常生活動作能力の有意な低下や中途覚醒の回数の有意な増加が見られた。唾液中α‐アミラーゼは介入群において有意に低下した。α‐アミラーゼの個人変化では介入群で１例を除き低下が見られた。

【考察】

以上の結果より、認知症高齢者に対するアロマテラピーの施行がストレスの軽減、また日常動作能力や睡眠の質の維持に有用であることが示唆された。

【結語】

今後精油選択や濃度、対象者の人数、中長期的な効果の検証が課題として残る。

0－14

女子学生の集中に及ぼすレモンの香りの影響

三井　知子 1)　鈴木　由美 1)　相原　由花 1)2)　北條　理恵子 3)
1)ホリスティックケアプロフェッショナルスクール
2)関西医科大学心療内科学講座
3)独立行政法人労働者健康安全機構　労働安全衛生総合研究所
【目的】
レモン精油の香りによる作業効率や集中力に及ぼす影響を検討する。
【方法】
研究に同意した女子高生 6 名、女子大生 6 名に、香りの有無による異なった環境下で内田クレペリン検査を実施し、回答数と誤答率を比較した。検査に慣れるため、調査前に練習を 1 回行った。香りあり条件では、レモン精油を精製ホホバオイルに 2%希釈したものをシートに 2 滴垂らし、胸鎖関節下 5 ㎝に貼付した。香りなし条件では、ホホバオイルのみを使用し、同様に貼付した。研究協力者には香りの有無を知らせず検査に回答をしてもらった。はじめにホホバオイルのシートを貼付して 5 分間ゆっくり呼吸した後、内田クレペリン検査を 15 分間行った。その後 15 分間の休憩をとり、次に香りつきのシートを貼付し、同様に 15 分間検査を行った。各条件での回答数と誤答率を算出し、そのあとに香りの印象についてインタビューを行った。
【結果】
　内田クレペリン検査の結果では、香りあり条件は香りなし条件と比較して、回答数は 10 名、誤答率は 7 名が増加したが、有意な差はなかった(P＝0.194、P＝0.317)。インタビューでは、アロマパッチを用いて作業開始後、しばらくしてレモンの香りが確認できていたことが分かった。香りあり条件では、「無心になれた」、「集中できた」、「苦痛に感じなかった」などと語られた。
【考察】
一般的にレモン精油の香りは、脳を刺激して、集中力を向上させる効果があると報告されているが、本研究では回答数、誤答率ともに増加する傾向が見られた。レモンの香りは作業速度は上げるが、集中力は下げる可能性が示されたが、人数が 12 名と少なく、さらに年齢が違うなど対象の選択に課題がある。またインタビュー結果から、レモン精油の香りは単純計算を繰り返すという作業のストレスを緩和できる可能性も示されたが、今後は人数を増やし、さらなる検討していく必要があると思われる。

O－40
『ヨーガ療法により免疫賦活は可能か？』中間報告

今村　たか子 1)、赤木　純児 2)、木村　慧心 3)
1)一般社団法人ヨーガ療法学会　認定ヨーガ療法士
2)玉名地域保険医療センター　病院長

3)一般社団法人ヨーガ療法学会　理事長

【背景】

　がん治療において、注目を集めている免疫チェックポイント阻害剤を使うと、免疫のブレーキが外れて、その結果、**がんが**縮小して治癒することが可能になってきた。**これらのことは、**がん治療には免疫が不可欠であることを示しているばかりでなく、免疫が健康寿命や「未病」にも深く関係していることを示唆している。今回、我々はヨーガ療法が免疫にどのような効果を与えるのかを検討した。

【目的】

ヨーガ療法実習が免疫系に影響を与えられるかどうかを検討する。

【対象】

健康成人 20 代～60 代 30 名（男 5 名、女２ 5 名）平均年齢 49 歳

対象は、ヨーガ未経験者で疾患などによる影響を除外するため、健康成人とした。

【方法】

令和元年 6 月から 11 月　熊本県の各地域で 3 ヶ月間。ヨーガ療法実習は日本ヨーガ療法学認定療法が『アイソメトリック・サイクリック・メディテーション』という技法を用いて指導をした。

この技法を認定ヨーガ療法士の指導の下、週 1 回実習し、その他の日は自宅実技用の DVD とチエックシートを配付して各自自宅にて週 3 回実習を行った。

ヨーガ療法の前、１ヶ月後、２ヶ月後、３ヶ月後に、末梢血採血を行ない、末梢血中の CD8+ T 細胞上の免疫チェックポイント分子（PD-1 と Tim-3)の発現を測定する。測定は㈱SRL でフローサイトメトリーにより行った。

【被験者の語り・結果】

・全身の脱力感、緊張と弛緩の感覚が実感。
・疲労回復、安眠。
・便秘改善。
・片頭痛改善。
・安心感。
・こむら返り改善。
・筋力アップ。

【考察・結語】

ヨーガ療法により、多くの方で、生活の質の向上が認められた。**採血**の結果は本会で報告致します。これらの生活の質の改善と免疫がどのように関連するかは非常に興味深いと考えます。

O－49

神奈川県平塚市「ひらつかはぐくみ葉酸プロジェクト」：健やかな妊娠・出産・産後のための公民連携による取り組み

蒲原　聖可 1)、萩尾　みゆき 2)、磯部　達男 2)、竹埜　格子 2)、古畑　真希子 2)、三浦　真弓 2)、大内　康子 2)、佐草　牧恵 2)、木原　雅子 2)、冨山　美穂子 2)、平沢　綾菜 1)、寺崎　美子 1)、関　浩道 1)

1)株式会社ディーエイチシー

2)平塚市健康課

【背景】

厚生労働省は神経管閉鎖障害リスク低減のために葉酸サプリメントの摂取を推奨している。しかし、環境省エコチル調査では、9 割以上の妊婦が葉酸を適切に摂れていないとされた。神奈川県平塚市は、2017 年 4 月、平塚市子育て世代包括支援センター「ひらつかネウボラルームはぐくみ」を開設し、妊婦全員に面談を行い、ハイリスク群への早期支援を実施するなど、先進的な取り組みが注目されている。

【目的】

妊娠・出産・産後のアウトカム改善のための公民連携による栄養支援プログラムの構築と推進

【方法】

平塚市とＤＨＣは、2017 年 12 月 21 日に「健康づくりの推進に係る連携協定」を締結し、公民連携による健康づくり施策を協議した。母子保健分野では、二分脊椎症の発症が確認されたこともあり、ネウボラでの面談時に葉酸サプリメントの摂取確認を行い、産後の「赤ちゃん訪問」では実態調査を行った。

【結果】

調査の結果、妊娠中の葉酸サプリメントの利用率は 3 割弱(28.3%)であった。そこで、平塚市健康課では、妊娠・出産アウトカムの改善のための施策を検討し、「妊娠 1 ヵ月前からの葉酸サプリメント摂取率 100%」を目標として、2018 年 10 月 1 日、「ひらつかはぐくみ葉酸プロジェクト」を開始した。この公民連携事業では、（1）葉酸サプリメントの摂取率調査、（2）ネウボラでの栄養指導、（3）啓発活動（講演会、ＨＰ、広報)、（4）葉酸含有食品の地場産品の推奨などを行っている。

【考察】

最新研究では、妊娠前からの葉酸サプリメントの摂取が、神経管閉鎖障害のリスク低減だけではなく、口唇口蓋裂や心奇形といった先天性疾患、不育症、妊娠高血圧症候群、常位胎盤早期剥離、早産、低出生体重児、産後うつ病、自閉症のリスク低減など妊娠・出産アウトカムを改善することが示されている。今後、統合医療の視点から、公民連携によるプレコンセプションケアとしてのひらつかはぐくみ葉酸プロジェクトを推進する。

P－20

小学生の”足袋の生活”は外反母趾の予防に繋がるのか？

金子　潤
中京大学スポーツ科学部

【背景】

足袋は靴底が薄く、裸足感覚のある日本伝統の履物である。また母趾が独立しており、動かしやすい形状である。

【目的】

本研究は、”足袋の生活”送る小学校と一般的な小学校において足の形状（土踏まずと母趾）と機能を比較し、特に母趾の変形に関して検証することを目的とした。

【方法】

調査対象は、埼玉県行田市内の”足袋の生活”を実施する A 小学校（以下：”足袋群”）の 2･5 年生（112 名）、および　対照群として同市内の B 小学校の 2･5 年生（110 名）とした。”足袋群は、朝登校すると子どもたちは足袋（靴底の厚さ 2mm の祭り足袋：きねや足袋製）に履き替え、校舎内および校庭を足袋で1年間過ごした。調査項目は足の形状として、アーチ高率、母趾 MP 関節 ROM、母趾外反角度を計測し、機能については足部筋力の指標として足趾把持力を計測した。計測データは学年と性別に毎に集計し、分析した。計測は”足袋の生活”が始まる前（プレ計測）と実施から 1 年後（ポスト計測）の 2 回実施し、ポスト計測に対する変化量を対照群と比較した。本研究は中京大学体育学研究科倫理委員会の承認を経て実施された。

【結果・考察】

母趾外反角度は 2 年生男子（”足袋群”：8.7 度→7.0 度（-1.7）、対照群：8.0 度→8.8 度（+0.8）、,$p<0.01$）および 2 年生女子（”足袋群”：9.1 度→7.6 度（-1.5）、対照群：7.0 度→9.3 度（+2.3）、 $p<0.01$）で”足袋群”において減少した。さらに、母趾 MP 関節の屈曲可動域は 2 年生男子（$p=0.009$）および女子（$p=0.0015$）共に対照群と比較して減少（可動域が小さく）しなかった。

【結論】

小学生の”足袋の生活”は靴の着用によって生じる母趾の変形を予防できる可能性が示唆された。足袋での定期的な身体活動は、特に 7-8 歳の年代の子どもたちの足の形状と機能に有益かもしれない。